

源氏物語夕顔卷某院の怪

—それは〈もののけ〉ではない—

森 正人

— はじめに

この研究は、古代中世文学に描かれる〈もののけ〉について、それが発動する、言い換えれば人間に対して働きかける現象はどのように理解され、想像され、表現されていたかを検討することを目的とする。

特に人間と「モノ（霊、鬼、精などの超自然的存在）」との関係をめぐる文化人類学、宗教史学、民俗学の領域における研究成果を踏まえ、文学研究の領域における研究成果と研究動向を検証し、これまでの作品解釈の誤りを正し不備を補うとともに、今後の読解と分析の基礎を整備しようとするものである。

本論文は、いまだ共通認識の得られていない〈もののけ〉とは何か、何が〈もののけ〉であるかについて改めて見解を提示する。すなわち、「夕顔」巻における某院の怪異に関する「ものにおそはる」なる

表現と、この事件の後に光源氏にもたらされた心身の異常に関する周囲の「御もののけなめり」という見立て、及び両者の関係に検討を加える。この検討の結果は、源氏物語の読解にも若干ながら寄与するであろう。

二 〈もののけ〉とは何か

〈もののけ〉という事象に対しては現在もなお正確な理解が行われていない。文学研究者が注釈書や辞典あるいは事典に的確な説明を施していないために、混乱はいつまでも残ってしまう。それを論うことはさしひかえて、ここに改めて〈もののけ〉とは何かについて私見（一）を提示しておく。

〈もののけ〉とは「物の気」である。第一に、神ならぬ物すなわち劣位の超自然的存在（人の霊

魂、鬼、天狗、狐など特定の動物の霊魂)が発する気(視覚、触覚ではとらえられないが、立ちのぼり、あるいは漂う性質を有する)のこと、第二に、人間に憑依しあるいは近づいた超自然的存在の発する気が人間に作用することによって引き起こされる心身の不調という現象。第三に、これが転じて、人の心身を不調に至らせる気を発する原因としての超自然的存在。

〈もののけ〉が「気(け)」であることは、たとえば次のような用例に明らかである。

①夜昼添ひさぶらひて、他人々をば、御あたりにも寄せず、大納言殿の上をば、「御物怪の、かくのみしみたまひつる御あたりに」と言ひなし、御乳母どもも、ゆゆしとて、いみじく制し申せば

(夜の寢覚卷二)

②玄鑿ノ弟子ノ僧、或宮原ニ参ジテ御邪氣ノ加持ヲ致ス所ニ、加持撰縛セラレテ、天狗人ニ託シテ「我食ヲ求ンタメニ宮中ニ参ゼリ。指テ付キ悩マシ奉ルコトナシ。然レドモ我ガ悪氣ヲ今貴体ニソミテ悩ミ玉フ也。」(真言伝卷第四玄鑿)

①は病み臥している中の君の懐妊を隠すために、〈もののけ〉と言ひ立てて姉の大君(大納言の上)をも近づけまいとする場面である。「しみたまひ」とは中の君の身体とその居所に霊物の「気」が染み付いていると言ひなしているのである。②にも、ある貴人の邪気(もののけ)は、近づいた天狗の悪しき気が身体に染むことによつて引き起こされたものであると説明している。これらによつて、〈もののけ〉とは霊物の目に見えない気が、水や煙や匂いのように人の身体に付着あるいは浸透することによつて起きると思ひ描かれていたことが知られる。したがつて、①を「御物怪が、こんなにとりついている」(日本古典文学大系頭注)、「御物怪がこのようにいつも取り憑いていらつしやる」(新編日本古典文学全集現代語訳)などと解釈しては、〈もののけ〉の性質を捉えそこね、「しみ」の語感を読み外してしまふ。

そして、〈もののけ〉が、霊物の悪しき気によつて引き起こされる心身の不調であることは、たとえば次の例が端的に示している。

③中興の近江の介がむすめ、もののけにわづらひ

て、淨藏大徳を験者にしけるほどに

(大和物語第一〇五段)

④大殿には、御もののけいたう起こりて、いみじうわづらひ給。

(源氏物語「葵」一・三〇三頁、源氏物語の引用

は新日本古典文学大系による)

これらの用例は、靈物あるいはその気によつて引き起こされる病あるいはその症状を指すとみてよい。ただし、③は「靈物の発する気」という原義を残しているであろう。

こうした用法から、人に接近あるいは接触して悪しき気を発し、心身の不調を引き起こす靈的存在自体を(もののけ)と称するようになる。

⑤御もののけのねたみののしる声などのむくつけさよ。
(紫式部日記)

⑥御心あやまちも、ただ御物のけのしたてまつりぬるにこそははべめりしか。

(大鏡第三卷 伊尹)

これらは、意志を持ち行為し人に働きかける存在として記述されている。⑤の場合は(もののけ)その

ものでなく、(もののけ)を駆り移された物付(靈媒)の口を借りて叫び声をあげているのであるが、そのようにさせている靈的存在を主体として扱っている。こうして、(もののけ)は悪しき気を発し、人に心身の不調と異状を引き起こす原因としての靈物そのものである。

こうした三つの用法は画然と分かれるのではなく、実際の用例がいずれに当たるかあいまいであることが多いのは、言葉というものの性質として当然のことである。

三 何が(もののけ)か―「夕顔」巻の怪異

(もののけ)とは何かをさらに明瞭にするために、源氏物語「夕顔」巻において某の院で夕顔の君がと殺されてしまったという怪異を取り上げる。その事件は、光源氏には次のように「物におそはる」「物にけどらる」として把握されている。

①よひ過ぐるほど、すこし寝入り給へるに、御枕上にとおかしげなる女いて、「をのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくこ

となることなき人をいておはしてときめかし給
こそいとめざましくつらけれ」とて、この御か
たはらの人をかきをこさむとす、と見給。物に
おそはるる心ちしておどろき給へれば、火も消
えにけり。うたておほさるれば、太刀を引き抜
きて、うちをき給て、右近を起こし給。これも
おそろしと思たるさまにてまいり寄れり。

〔夕顔〕一・二二二頁

② といたく若びたる人にて、物にけどられぬる
なめりとせむ方なき心ちし給。

〔夕顔〕一・二二四頁

③ このおとこを召して、「ここに、いとあやしう、
物におそはれたる人のなやましげなるを、『ただ
いま惟光の朝臣の宿る所にまかりて、急ぎまい
るべきよし言へ』と仰せよ。(中略)』などもの
のたまふやうなれど」

〔夕顔〕一・二二五頁

源氏物語の研究者の大多数は、右の事件を(もの
のけ)現象として理解し、それを引き起こしたもの
の正体は何かをめぐっておおよそ三説―廢院の妖怪
説、六条御息所(またはその侍女)の生霊説、妖怪

と生霊との交錯説に分かれる―を立てて論争が続
られ、またその作品構成上の意味や叙述の方法を
めぐって検討が重ねられてきた。

しかし、この現象は(ものけ)ではない。光源
氏自身はこれを(ものけ)とは把握してはいないし、
源氏物語の語り手もまた(ものけ)とは述べてい
ない。

この事件は、源氏物語本文に二度にわたって記述
されている通り、「物におそはる」という現象によつ
て引き起こされたのである。まず、この語の語義と
用法を明らかにしうる用例を掲げる。

① 内外なる人の心ども、物におそはるるやうにて、
あひ戦はむ心もなかりけり。 (竹取物語)

② 彼ノ寝タリツル五位侍、物ニ被^{おそは}壓タル人ノ様ニ、
二三度許^{ばかり}ウメキテ

(今昔物語集卷第二十七第十八)

③ 夢

モノニオソハル、コト

(香葉鈔 大矢透『假名遣及假名字體沿革史料』二七による)

④ 魘 モノニオソハル 悪夢也／睡中―也又上加
卒字 (色葉字類抄)

③ 河陽県の后、つゆもまどろめば、いみじうなや
みわづらひ給ふとのみ見えつつ、襲はれ襲はれ
して、常よりも面影に見え給ひつゝ

(浜松中納言物語第四)

④ Vosunarurueta ヲソワレ、ルル、レタ (魔
はれ、るる、れた) 例、Yumeni vosuaruru. (夢
に魔はるる) 眠っていて胸苦しさを感ずる、あ
るいは、うなされる。 Mononi ~ Vosoisō

(『邦訳日葡辞書』)

用例はさほど多くないけれども、「物におそはる」と
は①竹取物語に譬喩表現として用いられるほどに一
般的なことであった。そして、②今昔物語集の用例、
③香葉鈔の表記、④色葉字類抄および⑤日葡辞書の
説明から、「物におそはる」あるいは単に「おそはる」
とは睡眠中の経験で、悪夢を見たり、胸苦しさを覚
えてうなされる現象であることは明らかである。そ
の悪夢や胸苦しさは「もの」すなわち何らかの靈物
によってもたらされるにしても、目が覚めてしまえ
ば解消してしまうのであって、他の靈的存在によっ
て引き起こされる事象とは明瞭に区別される。

「夕顔」巻の某院の怪は(もののけ)ではなかった。
久慈きみ代(2)などごく一部の論者は、この事件
を(もののけ)とは呼ばない慎重な態度を持してい
るが、しかし、この怪異を引き起こしたものが何で
あるかの議論の過程で、これは(もののけ)ではな
いと断ぜられたことはない。こうした扱いが議論に
混乱を引き起こし、あるいは議論の帰趨に影響しな
かったとは言えない。また、この事件を(もののけ)
と見なすことによって、文学研究の領域における(も
ののけ)把握に歪みをもたらしたであろうことも否
定しがたい。

なお、竹取物語の用例も「何か恐ろしいものに
おびやかされ、声も出さず手足も動かさず、心の惑う
ような状態」(三谷栄一『竹取物語評解』有精堂
一九五六年)という説明でおおむね十分であるはず
のところを、近年は「物の怪におそわれるような」(新
日本古典文学全集現代語訳)、「物の怪にでもとりつ
かれたような感じで」(新日本古典文学大系脚注)と
方向違いの解釈が行われるようになった。憶測すれ
ば、この言葉の用法を十分に吟味しないまま源氏物

語「夕顔」巻の用例を参照し、源氏物語解釈の誤りをここに導き入れたからであろう。

なお付言しておく。「物におそはるる」についての『竹取物語評解』の「心の惑うような」という部分は適切でない。これは源氏物語「夕顔」巻の②「物にけどられぬる」をも加えた説明ではないか。この語は源氏物語にもう一例「何か、物にけどられにける人にこそ」（「手習」五・三二九頁）という例があつて、靈物によつて正気を奪われた状態を言う。「物におそはる」と同義ではない。

四 怪異の余波―これが（もの）のけ

某院で出現した靈物は光源氏に恨めしさを訴えつつ、今光源氏が深く心を寄せている夕顔の君にその靈力は向けられた。光源氏はこれに気丈にも対処したものの、その後は心身の不調が続いた。

① 御胸せきあぐる心ちし給ふ。御頭（むく）も痛く、身も熱き心ちして、いと苦しくまどはれたまへば

〔夕顔〕一・二二九頁

② ながめがちに音をのみ泣きたまふ。見たてまつ

り咎むる人もありて、御もののけなめりなど言ふもあり。
〔夕顔〕一・二二七頁

某院での怪異の余波である(3)。常と異なる光源氏の様子に「御もののけのように見受けられる」という周囲の者達の見立ては見当違いではない。あの折に接近した靈物の悪しき気が光源氏に作用して、今なお心身に不調を引き起こしているのであつて、これこそ典型的な（もの）のけ」といふべきであろう。ただし、この反応をとらえて、さかのぼつて某院の怪そのものを（もの）のけと呼びなすのは当たらない。「夕顔」に続く「若紫」巻で、わらわ病みを患う光源氏は、北山の聖（大徳）の加持を受ける。発作はひとまず沈静したが、聖は光源氏の帰洛を次のように引き止める。

③ 大徳、「御もののけなど加はれるさまにおはしましけるを、こよひはなを静かに加持などまいりて、出でさせ給へ」と申す。〔若紫〕一・二五六頁

「夕顔」巻から直接連続はしないが、聖が「（わらわ病みに）ものけが加わっている」と指摘するのは、某院の靈物の影響を言うと思ふのが自然であ

る。〈もののけ〉である否かは、陰陽師の占いや験者の判断に待たねばならなかった。

【注】

(1) 〈もののけ〉に関しては以下の拙論を参照されたい。

モノノケ・モノノサトシ・物恠・恠異―憑依と怪異現象とにかかわる語誌―『国語国文学研究』第二七号 一九九一年九月

見えないものを名指す霊鬼の説話 『論集平安文学』第五集 二〇〇〇年五月

紫式部集の物の気表現 『中古文学』第六五号

二〇〇〇年六月

『源氏物語と〈もののけ〉』(熊本大学ブックレット)

熊本日日新聞社 二〇〇九年五月

〈もののけ〉考―源氏物語読解に向けて― 三田村

雅子・河添房江編『源氏物語をいま読み解く 夢と

物の怪の源氏物語』翰林書房 二〇一〇年一〇月

〈もののけ〉考―現象と対処をめぐる言語表現―

『国語国文学研究』第四八号 二〇一三年三月

枕草子一本第二十三段「松の木立高き」における

〈もののけ〉調伏 『日本文学』第六五卷第一号

二〇一六年一月

(2) 久慈きみ代「夢から遠い女君六条御息所の「もののけ」―『源氏物語』の「ゆめ」「もののけ」「もの」の境界について―」(『駒澤国文』第四二輯 二〇〇五年二月)。

(3) 霊物の氣に触れた者に頭痛などの不調が起きるのは一般的で、「男不被殺こころをス成ヌル事ヲ喜テ、心地違ちがヒ頭かラ痛ケレドモ」(今昔物語集卷第十六第三十二)、「気怖シク思エケレバ、木伐人頭痛ク成テ」(同上第二十第二)などに見える。

(付記)

本論文は二〇一五年四月二十五日(土)に二松学舎大学で開催された説話文学学会例会シンポジウム「モノノケの宗教・歴史・文学」において発表されたものうち、おおむね前半に当たる。後半は『説話文学研究』第五十一号に「〈もののけ〉の憑依をめぐる心象と表現」として掲載される。